

死海文書4Q274 (4Q Tohorot A) の翻訳と注解

阿部 望

4Q274 (4Q Tohorot A) Translation and Commentary

ABE Nozomi

המאמר הקטן הזה בא להציג את תרגומו של 4Q274 ממגילות ים המלח ולפרש פירוש קצר על הטקסט ועל התוכן. תוך כדי הפירוש על הטקסט, ניסיתי לאפיין את קו המחשבה של אנשי קומראן, וגם ניסיתי להבהיר את סיבת הפרישה של אנשי קומראן ממקדש ירושלים ומהנהלת העבודה במקדש. יחד עם זה, ניסיתי גם להציג איזו הבעיה היתה בין אנשי קומראן לבין הפרושים בסוף ימי הבית.

1. はじめに

1947年から1956年にかけてワディ・クムラン近郊の11の洞窟から発見された死海文書は、紀元前250年から紀元68年の間に位置づけられている。クムランに移住したクムラン宗派の人々は、紀元前120年から紀元68年の間この場所で生活したと推測されているため、ここで発見された写本のすべてがクムランで書かれたとは言えない。外部からクムランへ持ち込まれた写本も含まれている。しかし、クムラン宗派の人々がこれらの写本を所持し保管していたことは間違いない。死海文書の価値は紀元前後一世紀の資料がそのまま残り、途中で第三者の手が入っていないオリジナル資料であるところにある。発見当初は写本断片群の中に、200ほどの旧約聖書写本が含まれていたため、現存する旧約聖書のマソラー写本（10～11世紀）よりも千年も古い聖書写本の発見であったという事実から本文研究の第一級資料と見なされ、聖書本文研究に関心が集まっていた。またクムラン宗派の代表的な宗派的文書である『聖書釈義（ベシャリーム）』、『感謝の詩篇（1QH^a）』、『共同体規則文書（1QS）』、『戦いの書（4QM）』など、それまで知られていなかった文書の発見は、クムラン宗派の宗教思想と宗派特徴を解明する手掛かりとして注目され、数々の研究成果が挙げられてきた。しかしながら、死海文書に含まれる律法解釈文書、つまりハラハー的文書¹

の研究は着手されることなく、死海文書のハラハー的文書とユダヤ教古典であるラビ文学との比較研究は、1980年代から90年代にかけてやっと始まった。そこでハラハー研究は他分野と比較すると立ち遅れた感がある。

紀元一世紀の主要なユダヤ教宗派は、サドカイ派、ファリサイ派、エッセネ派であったと考えられている²。多くの研究者によって、クムラン宗派とエッセネ派は同一であると見なされているので、本稿でもクムラン宗派＝エッセネ派という観点で論を進めて行く。そもそもユダヤ教の宗派が分裂した要因は、各々が属していた社会層に起因するとも言えるが、さらに決定的な原因となったのは律法解釈の違いであるということが最近の研究で明らかになりつつある。紀元前後一世紀のユダヤ思想の発展と歴史背景を解明するためには、宗派間の律法解釈の比較研究が不可欠であり、死海文書のハラハー的文書を厳密に研究することの重要性が認識され始めたと言える。特に1994年に『トーラーの諸規定 מקצת מעשי התורה (4QMMT)³』（以下＝4QMMT）の発表以来4QMMT内で論じられているハラハーは、紀元200年に欽定編集された『ミシュナー』や250年～300年頃編纂された『トセフタ』内にも共通して存在することが指摘されている⁴。『ミシュナー』や『トセフタ』の編集年代が紀元3～4世紀であるため、紀元前後の時代背景の研究や新約聖書研究とこれらのユダヤ教文書は関係がないと今まで主張されてきた。ところが紀元前一世紀の死海文書内に『ミシュナー』や『トセフタ』との共通点が確認される以上、死海文書研究もユダヤ教文書と比較しながら論じていく必要があると言える。ユダヤ教文書内で議論されている内容の一部は、すでに紀元前から議論が始まっていた可能性があるからである。また『ミシュナー』という書物の理解も、紀元200年時点の律法解釈議論をラビ・イエフダー・ハナスイが編集した書物という認識より、紀元前から始まり議論され続けてきた律法解釈論争があまりにも広範囲に拡大したため、紀元200年の時点での総括として編集がなされ、共通の基礎テキストを作成して後代へ残したものと定義した方がより正確であると言える。また『ミシュナー』は、編集作業によって文体の統一と内容の整理が極度に行われたため、削除または割愛された部分が多いと推定されている。これに対して、『トセフタ』は、『ミシュナー』のような統一された文体ではなく、『ミシュナー』編集から除外された古い伝承が含まれている可能性が高い。そこで、ハラハーの発展史を観察するためには『トセフタ』の検討も不可欠と言うべきである。

2. 「清めと汚れ」に関するハラハー的文書

本稿では、死海文書内のハラハー的文書に絞って考察をしていくが、テーマをユダヤ律法の「清めと汚れ」に関する掟に絞ることにする。死海文書内で「清めと汚れ」の清潔規定を扱っているのは次の文書である。

	分類番号	日本語名称
1	CD, 4QD, 5QD, 6QD	ダマスコ文書
2	4Q159 (4QOrdinances ^a)	布告
3	4Q249 (4Qpap cryptA Midrash Sefer Moshe)	ミドラシュ・セフェル・モシェ
4	4Q251 (4QHalakha A)	ハラハー A
5	4Q265 (4QMiscellaneous Rules)	諸規則
6	4Q274-278 (4QTohorot A-C)	清潔規定A-C
7	4Q284 (4QPurification Liturgy)	浄化儀礼
8	4Q394-399 (4QMMT מקצת מעשי התורה)	ハラハー書簡 (トーラーの諸行為)
9	4Q414 (4QRitual of Purification A)	浄化儀礼
10	4Q512 (4QRitual of Purification B)	浄化儀礼
11	4Q513 (4QOrdinancesB)	布告B
12	4Q514 (4QOrdinancesC)	布告C
13	11Q19-20 (Temple Scroll)	『神殿の巻物』

これらの文書の中で、今回は「清潔規定A」と呼ばれる4Q274 (4Q Tohorot A) に焦点を絞って翻訳と注解を試みることにする。この文書に絞った理由は、テキストが比較的しっかりと残っているためであり、旧約聖書の記述をベースに発展させた議論であるため、聖書本文との対比が可能だからである。聖書本文と対比することによって、クムラン宗派のハラハー理解を鮮明にすることができるからである。

3. クムラン宗派分裂の原因と清潔規定の重要さ

クムラン宗派の人たちが死海沿岸のワディ・ヒルベット・クムランに移住したのは考古学発掘の結果から紀元前120年に位置付けられているが、彼らがエルサレム神殿を中心としたユダヤ教宗派の主流から分裂したのは、より以前のことと推測される。分裂した年代は諸説が提案され決着を見ていない。しかし本稿では、ヴェルメッシュ⁵とミリック⁶の提案にしたがい、分裂年を紀元前

152年として議論を進めていくこととする。その理由は以下の通りである。(1) 死海文書の宗派文書内にハスモン朝以前の言及が存在しない。(2) 死海文書に登場する「悪の祭司 (כהן הרשע)」と呼ばれている人物が、神殿の祭司の代表である大祭司ヨナタンであると推測される。この点から、ヨナタンが大祭司として奉仕した期間である紀元前152-143年の時期を分裂の年代と仮定することができるからである。

3-1 4QMMTに示された離脱理由

クムランの第4洞窟から発見された文書4QMMTには⁷、なぜクムラン宗派の人たちがエルサレムの祭司集団から離脱したのかを示す一文が含まれている。

4QMMT (4Q397) C 5b-11a

<p>不法と淫売の〔ゆえに〕場所の一部分が失われた (滅ぼされた)。モーセの書に「あなたは〔あなたの家〕に忌むべきものを持ち込んではいならない (申命記 7:26)。なぜなら忌むべきものは憎むべきものであるからである」と書かれている。そして〔あなたがたは知っているが〕、私たちは (自分たちを) 多くの民から分離した。〔あなたがたのすべての汚れから〕、これらの事に関わり合いになることから、これらの事について〔彼らと〕一緒になることから。あなたがたが〔知っているように〕、私たちの手の中に騙し、偽り、悪は見出され〔ない〕。なぜなら、これらのことに関して私たちは〔心を〕込めているからである。さらに、私たちはあなたに、モーセの書と預言者とダビ〔デ〕の書、各世代の〔行い〕を理解するように書いた。</p>	<p>בגלל [ההמס והזנות אבדו מקצת] מקומות [ואף] כתוב [בספר משה שלום] תבא תועבה א[ל ביתך כי] התועבה שנואה היא [ואתם יודעים ש] פרשנו מרוב הע[ם] וגמול טמאתם [ו] מהתערב בדברים האלה ומלבוא ע[מהם] לגב אלה ואתם יודעים שלוא [י] מצא בידנו מעל ושקר ורעה כי על [אלה א] נחנו נוהגים א[ת לבנו ואף] כתב[נו אליה שתבין בספר משה] [ובספר] ה[ב]יאים ובדו[יד] [במעשי] דור דור</p>
<p>テキストの引用はElisha Qimron & John Strugnell, MIQṢAT MA'ĀŠE HA-TORAH, <i>DJD</i>10 (1994) による。</p>	

この記述には、クムラン宗派がエルサレム神殿を中心とした当時のユダヤ教各派から離脱した主な理由と思われる言葉が含まれている。その理由は「あなたがたのすべての汚れ (キムロンによる補足)」であり、あなたがたが「忌むべきこと、憎むべきこと」を行っているからであり、その手に「騙し、偽り、悪」があるからである。この脈絡から、申命記 7:26からの引用「あなたの家

に忌むべきものを持ち込むな」は、聖所に汚れを持ち込んでいることを意味していると考えられる。

さらに4QMMTの冒頭部分(4Q394)には、1年364日の暦と祭日を示す文書が存在する⁸。1年364日の暦を冒頭に据えて批判を始めるという議論形式から、クムラン宗派と他の宗派(主にファリサイ派)との大きな違いは、使用している暦にあったと推測できる。この両派の対立の激しさは次の一文から伺い知ることができる。

3-2 クムラン宗派と他宗派の対立

4Q171 Frags. 1-10 Col. IV 7-9

<p>7 悪しき者は正しい者を待ち伏せ、彼を殺そうとする。主は彼をその者の手中に捨て置かれず、彼が裁かれる時、彼を罪に定めない。(詩編37:32-33)</p> <p>8 この意味は悪しき祭司についてである。彼は義の教師を待ち伏せ、彼を殺そうと欲した。[掟と] トーラーについて</p> <p>9 彼(義の教師)が彼(悪の祭司)に送った。</p>	<p>7. צוֹפֶה רָשָׁע לְצַדִּיק וּמִבְקֵשׁ [לְהַמִּיתוֹ יְהוָה] לֹא יַעֲזֹבֵנו בְּיָדוֹ [לֹא יִרְשָׁעֵנוּ בְּהִשְׁפָּטוֹ].</p> <p>8. פִּשְׁרוֹ עַל [הַכּוֹהֵן הָרָשָׁע אֲשֶׁר צִפֶּה לְמוֹתוֹ] הַצַּדִּיק [וּבְקֵשׁ לְהַמִּיתוֹ] עַל דְּבָרֵי הַחֹק וְהַתּוֹרָה.</p> <p>9. אֲשֶׁר שָׁלַח אֵלָיו</p>
<p>テキストの引用は E. Qimron, <i>The Dead Sea Scrolls</i>, The Hebrew Writings, Vol. 2, Jerusalem (2013): 303による。</p>	

これは詩編37編のペシエル(פִּשְׁרֵל)と呼ばれる聖書釈義である。この内容によれば、クムラン宗派とユダヤ教主流派との間に聖書内に書かれる掟の解釈において大きな相違があり、これが発端となって対立が生じ、ユダヤ教主流派の代表である悪の祭司がクムラン宗派の代表である義の教師を殺そうと図るほどの事件が起きたことが示されている。もしこれが事実だとしたら、両派対立の原因は律法解釈であったと結論でき、しかも義の教師が悪の祭司に何らかの文書を送りつけたことが発端であったとも読み解ける。キムロンとストラゲネルはこの送られた書とは4QMMTのことだと主張している。もしこれが事実だとすると、8行目終わりの空欄には「חֹק 掟⁹」という語を補足することができる。またもし、離脱の原因として示される「忌むべきこと、憎むべきこと」は、汚れと清めの問題であると解釈すると、宗派分裂の理由は(1)暦の問題、(2)エルサレムや神殿の清潔規定の問題、(3)エルサレム祭司の不正の問題の3つに集約することが可能である。本稿で中心テーマとして絞った清潔規定

の問題がいかに重要であるかは、以上の内容から証明できる。

3-3 ハラハー書簡4QMMTの特徴

神殿の汚れとその聖（の規定）は、他の トラー内のだの罪よりも難しい。	קִשָּׁה טוֹמְאָת מִקְדָּשׁ וּקְדָשׁוֹ מִכָּל עֲבִירוֹת שְׁבִיתוֹרָה
『トセフタ』 シャヴオット 1 章ハラハー 3, Vienna Heb. 20写本	תוספתא, שבועות, פרק א' הלכה ג' כ"י וינה

『トセフタ』の中に上記のような言葉が残っているように、神殿に関する清潔規定は他のどの規定より重要であり、最も厳格であったことが伺える。もちろん『トセフタ』は紀元三～四世紀の書物であるため、紀元前後一世紀の状況は反映していないという主張も可能であるが、紀元70年の神殿崩壊と同時に「神殿の汚れとその聖の規定」は形骸化した事実を考慮すれば、『トセフタ』の記述は何らかの古い伝承が残っていると推測できる。話を4QMMTに戻すと、この文書には約20の律法議論が納められている。そのほとんどが神殿祭儀と清潔規定、祭司への奉納物の議論である。また一見関係がないように見える「植えて四年目の果実の規定」は、祭司への聖なる奉納物の議論であり、「会衆に加われない人の規定」は清潔規定によって神殿に入場が許されるか否かの議論であり、「盲人と聾啞者の規定」は差別の問題ではなく、清潔規定を人の助けを借りずに自力で厳守できるか否かの問題である。4QMMTには他の死海文書、例えば『ダマスコ文書』や『共同体規則文書』などに納められている「犠牲の燔祭」、「シャバットと祭日の規定」、「結婚、男女関係と純潔の規定」、「農事」、「病氣」、「十分の一税」、「異邦人との交わり」、「金銭と財産の規定」、「クムラン宗派への入会と誓約」、「クムラン宗派内での生活」、「クムラン宗派体の組織」などの議論は含まれていない。4QMMTが他宗派との議論を前提としており、クムラン宗派としての意見を確立するために書かれた文書だからである。4QMMTの内容吟味からも、清潔規定が他宗派との違いを決定付ける重要事項であったことがわかる。

3-4 『ダマスコ文書』からの証拠

以下に引用する『ダマスコ文書』には人間が罪に陥る3つの網についての言及がある。その3つの網として「姦淫」「富」の他に「聖所の汚れと清さの問題」が挙げられている。クムラン宗派の宗派思想の特徴を論ずるためには、清

潔規定への言及が不可欠なのである。

<p>その意味は、ベリアル<small>ベリアル</small>の三つの網である。 彼はそれらを三つの種類の義として彼らの前に 設けた。第一は姦淫である。 第二は富である。第三は聖所を汚すことである。 これから這上がる者は、あちらに捕らえられる。 これから逃れる者はあちらで捕らえられる。 『ダマスコ文書』 IV14-19 (CD^a IV14-19)</p>	<p>פִּשְׁרוֹ שְׁלוֹשֶׁת מְצוּדוֹת בְּלִיעָל וַיִּתֵּן פְּנִיָּהֶם לְשְׁלוֹשֶׁת מִיְּנֵי הַצִּדָּק הָרְאוּשׁוֹנָה הִיא הַזְנוּת הַשְּׁנִיָּת הִיא הַשְּׁלִישִׁית טָמְא הַמִּקְדָּשׁ הַעוֹלָה מִזָּה יִתְפַּשׁ בָּזָה וְהַיֵּצֵל מִזָּה יִתְפַּשׁ בָּזָה</p>
<p>テキストの引用は E. Qimron, <i>The Dead Sea Scrolls</i>, The Hebrew Writings, Vol. 1, Jerusalem (2010) : 10による。</p>	

上記に加えて『ダマスコ文書』には「シャバットと祭日の規定」も含まれているが、見方によればこれも清潔規定の一部であると解釈することができる。「安息日を守って、これを聖とせよ」(申命記5:12)とある通り、シャバットとは時間の聖別であり、これを破ることは聖を汚すことになるからである。

4. 4Q274 (4Q Tohorot A) の写本状況

ここまで清潔規定を理解することの重要性を述べてきたが、ここからはクムラン文書中のハラハー的文書である4Q274 (4Q Tohorot A) の翻訳と内容を論じていきたい。4Q274 (4Q Tohorot A) は、その分類番号が示すように死海沿岸にあるクムランの第四洞窟から発見されたもので、写本の年代は紀元前一世紀、ヘロデ時代と推定されている。この写本断片は、1999年にヨセフ・バウムガルテンによって発表されたものであるが¹⁰、紀元前一世紀のユダヤ社会においてすでに細かな律法議論があったことを示す文書として極めて重要なものと言える。

この文書の七つの断片 (Fragment, 以下=Frg.) が確認されている (Frg.1 i, Frg.1 ii, Frg.2 i, Frg.2 ii, Frg.3 i, Frg.3 ii, Frg.4)。この中の、Frg.1 i と Frg.1 ii、Frg.2 i と Frg.2 ii、Frg.3 i と Frg.3 ii を繋げて復元することが可能で、その結果4つの写本断片として理解することができる。ただしFrg. 4は破損が激しくほとんど数文字しか確認することができない。今回は、これらの写本からFrg. 1を検討対象とする。

以下にバウムガルテンによって発表されたヘブライ語テキストを引用するが、ヘブライ語原文を文法的にどのように分析したかを明確に示すため、母音点を附して私的解釈を示すことにする。当然のことながら、死海文書のヘブライ語原文には母音点は附されていない。母音点付記は、旧約聖書テキストを正

確に伝承させるために紀元後の七世紀頃から始まったものであり、紀元前にはまだ考案されていない。旧約聖書本文に附される母音点方式は、バビロニア式、エレッ・イスラエル式（パレスチナ式）、ティベリヤ式の三方式が考案されたが、ユダヤ社会に最も受け入れられた方式はティベリヤ式であった。この方式は、イスラエル北部、ガリラヤ湖畔の町ティベリヤ周辺で活動したマソラー学者（「伝承者」の意）と呼ばれる人たちによって考案され、本文を正確に伝承するための母音符号とアクセント符号、そして朗唱符号のシステムなどによって構成され、紀元8世紀には完成されたと推測されている。本稿で採用する母音点方式は、このティベリヤ式符号（以下＝マソラー符号）をベースに、イスラエル国の「ヘブライ語アカデミー¹¹」によって制定された方式に従うものとする¹²。現在のヘブライ語印刷物はすべてこの方式が採用されているからである。なお、ヘブライ語テキストの引用にあたっては、1999年のバウムガルテン版に加えて、2013年にエリシャ・キムロンによって発刊されたキムロン版¹³も参照した。その後の研究成果と写本の再検討がなされているからである。

5. テキストと翻訳

以下のテキスト内に旧約聖書からの引用が含まれているため、その部分はフォントのポイントを落として少し小さめの文字で記している。

Frg.1 Coli

- | | | |
|--|---|---|
| אל ¹⁴ |] | 0 |
| יחל להפיל ¹⁵ את תחנונו משכב יג[ו]ן ישכב[ו] מושב אנה ישב. בדד לכול הטמאים ישב. | | 1 |
| ירחוק מן | | |
| הטהרה שתים עשרה באמה ב[ד]בר ¹⁶ אליו ומערב צפון לכול בית מושב ישב. | | 2 |
| רחוק כמדה הזות. | | |
| איש מכול הטמאים [אש]ר [יגע] בו ורחץ ¹⁷ במים יכבס בגדיו ואחר יואכל. כי | | 3 |
| הוא אשר אמר טמא טמא | | |
| יקרא בול ימי היות [בו הנגע]. והזהר דם לשבעת הימים אל תגע בזב ובכול | | 4 |
| כלי [א]שר יגע בו הזב ו[ש]כב[ו] | | |
| עליו ¹⁸ אשר ישב עליו. ואם נגע תכבס בגדיה ורחצה ואחר תוכל. ובכול | | 5 |
| מודה [א]ל תתערב בשבעת | | |
| ימיה בעבור אשר ל[ו]א תגאל את מחני קד[ש]י ישראל. וגם אל תגע בכול | | 6 |
| אשה [זב]ה דם לימים רב[ים]. | | |
| והסופר אם זכר ואם נקבה אל יגע בזב זוב טמא ¹⁸ בדוה בנדתה כי אם טהרה | | 7 |
| מן[נד]תה. כי הנה דם | | |
| הנדה קזוב ואשר נוגע בו. ואם תצ[א] מאיש שכבת הזרע מנעו יטמא הנוגע. ¹⁹ כול | | 8 |
| נוגע באדם מכול | | |
| הטמאים האלה בשבעת ימי טהרתו [א]ל יוכל כאשר יטמא לנפש האדם | | 9 |
| ורחץ וכבס ואחר[ו] | | |

- 〔翻訳〕 1. 彼は嘆願の祈りを始めてはならない²⁰。この者は悲しみの寝台に横たわり、嘆息の座に座る。この者はすべての不浄者たちから離れて一人座り、
2. 潔い者がこの者に話しかける時は、この者から十二キュビト (534cm) 離れる。この者はあらゆる家の北西の方向に、この尺度を保って座る。
3. 不浄な者は誰であっても、この者 (上記の汚れた者) に触れてしまったら、水で体を洗い、自分の衣服を水洗い、その後食事することができる²¹。これが「『汚れている、汚れている』
4. と叫ばなければならない。この患部が彼にあるあいだは」²²と言われていることである。

血の漏出のある女 (זָוָה Zava) は七日のあいだ、漏出のある男 (זָוָה Zav) に触れてはならない。彼女は、漏出のある男 (זָוָה Zav) が触れたすべての器、彼が横になった寝台、

5. または彼が座った物に触れてはならない。もし触れてしまったなら、彼女は自分の服を水洗いし、体を洗う。その後、彼女は食事をすることができる。彼女は七日のあいだ誰とも
6. 交わらないようにしなければならない。イスラエルの聖なる陣営を汚さないように最大限の努力をし、さらに彼女は、長期間血の漏出のある他の女に触れてはならない。
7. 七日間を数えている者は、男であっても、女であっても、不浄な漏出のある男や、不浄の清めが終わっていない他の月経の女に触れてはならない。
8. 月経の血は、漏出のある男 (の汚れ) と同じだからである。精液を漏らした男に、他の男が触れると、その男は汚れる。誰であっても、
9. 七日間の清めの期間を過ごしている最中の人々が、これらの不浄な人々に触れた場合、食事をしてはならない。彼が死体に触れて汚れを受けたのと同じように。その者は体を洗い、洗濯をし、その後

6. ヘブライ語表記の特徴

4Q274 (4Q Tohorot A) のヘブライ語は、以下の特徴を除いて旧約聖書のマソー本文に似た文法的表記になっている。旧約聖書の記述をベースにしているからだと思われる。以下に特徴的な表記をあげることにする。

6-1 母音 [o] の表示に、文法的表記ではカマツ・カタンになるケースでしばしばヴァウが使われる。

行数	文法的表記	4Q274の表記
1, 2	לְכָל	לכול
3	מִכָּל	מכול
4, 5	וּבְכָל	ובכול
4	כָּל	כול
6	בְּכָל	בכול

6-2 発音されないアレフの省略²³

行数	文法的表記	4Q274の表記
2	הַזֹּאת	הזות
5	מֵאֵד	מודה
他の死海文書テキスト		
4Qs ^f 10 : 16	מודה	

上記5行目のケースは、シェヴァー・ナア（有音シェヴァー）の直後に来る子音アレフ（א）は死海文書全体で発音されない傾向があり、旧約聖書のイザヤ書写本においても同様の現象を見つけることができる²⁴。

イザヤ書	マソラー写本	死海文書（1QIs ^a ）
47 : 6, 9	מֵאֵד	מואדה
52 : 13	מֵאֵד	מואדה
65 : 25	זֶאֱב	זב

6-3 語根の第一字がアレフ（א"פ）の語幹パアル未完了形

行数	文法的表記	4Q274の表記
3	יֵאכַל	יואכל
5	תֵּאכַל	תוכל
9	יֵאכַל	יוכל
他の死海文書テキスト		
1QS Col.5.16	יֵאכַל	יוכל
1QS Col.6.13	יֵאמְרוּ	יומר

語根の第一字がアレフ（א"פ）の語幹パアル未完了形では、子音אは発音さ

れない。そのためアレフは表記されたり、されなかったり統一性がない。3行目は לֹא־יִחַל になっていてアレフが残っているが、5行目の לֹא־יִחַל や9行目の יִחַל では表記されていない²⁵。

6-4 語末形の表記

8行目 מֵאֵל 死海文書では語末形が表記されないことがある。5行目では מֵאֵל となっている。

7. 注釈

7-1 隔離された者の汚れの状態

1-4行は汚れを受けた人から遠ざかる必要を論じているが、2種類の不浄者が登場している。隔離されている不浄者と「すべての不浄者」と表現される人である。隔離された不浄者は単数で語られ、「すべての不浄者」は複数で語られている。隔離されている不浄者は、不浄の程度がより重いためこのような措置を受けていると考えられ、「すべての不浄者」は不浄の程度がより軽いと推定される。バウムガルテンは、このテキストの構成がレビ記15章に対応して論じられていると想定した。そこで、1-2行はレビ記15章1-15節と対応すると仮定し、膿の漏出のある男性についての議論であるとした²⁶。この汚れた者は、汚れを移す可能性が残されているため隔離されており、町の外へ追い出す措置までは講じられないので、膿の漏出のある男性と理解するのが相応しいと判断した。

これに対してミルグロムは、1-2行目に論じられている不浄者Aに他の不浄者Bが触れると、不浄者Bは(3行目)不浄の程度が上がると言及されているところから、1-3行目に論じられている不浄者Aは膿の漏出者ではなく、より重い不浄者と見なされる重い皮膚病患者であると理解した²⁷。膿の漏出のある男性のケースでは、3-4行にあるような重い皮膚病について論じたレビ記13章45-46節が引用されるはずがないこと。また、「この者から十二キュービト(44.5cm×12=534cm)離れる」(2行)や「この者はすべての(他の)不浄な者たちから離れて一人座り」(1行)、「この者はあらゆる家の北西の方向に」(1行)の内容は、非常に重い汚れを推測させるからである。重い皮膚病患者と同じ天幕にいただけで、例えば直接触れることがなくても汚れが移ると理解していたからこそ、このような措置が講じられたというのである。

他の見解としてキムロンはレビ記14章8節「清めの儀式を受けた者は、衣服

を水洗いし、体の毛を全部そって身を洗うと、清くなる。この後、彼は宿営に戻ることができる。しかし、七日間は自分の天幕の外にいないなければならない」の記述を拠り所として、不浄者Aは重い皮膚病患者であったが、病気が治癒したため、清めの儀式が始まった時期（7日間の潔め期間）の者と理解した。ここで隔離されている状態は、レビ記14章8節の「自分の天幕の外」にいる状態と同じであると仮定した。不浄者Aの清めの儀式が始まったからこそ、嘆願の祈りを始めていると理解したため、「～のとき」という補足をした²⁸。重い皮膚病が癒えていない状態なら町の外へ追い出されているはずだが、不浄者Aは町の外にはなく町の中におりつつも、なお家の外に隔離されているからである。この考えに賛同するのがトーマス・カゼンで、癒えているからこそ「嘆願の祈り」（1行）という文言が存在していると結論した²⁹。カゼンは4Q521にある、7日間の潔め期間中は罪の許しを祈らなければならないという規定の実践がここにあるとした。しかも町の中での隔離はレビ記14章8節の「七日間は自分の天幕の外にいないなければならない」という記述に通じると考えたのである。

これに対してハナン・ビレンボイムは、病気が癒えて清めの儀式が始まった時期とは断定できないとする。3－4行目にレビ記13章45－46節からの引用があり、特に46節に「その人は独りで宿営の外に住まねばならない」と記述された状態こそ4Q274と合致するもので、1行目に「この者はすべての不浄者たちから離れて一人座り」と書かれた意味は、すべての他の不浄者から離れて隔離された状態を指し、「離れて一人座り」は46節の「その人は独りで宿営の外に住まねばならない」に対応すると結論した³⁰。そうすると1行目の祈りは、重い皮膚病の癒しを求めた祈りであるということになる。このように理解すると、フラウィウス・ヨセフスがレプラ患者³¹に関する律法を論ずる記述との整合性を見出すことができることになる。ただしヨセフスはあくまでも追放を意図しており、4Q274が示唆する十二キュビト（約5メートル）の記述と矛盾をきたすことになる。そこで私見では十二キュビトの隔離は追放には当たらないので、彼は町の中にいると仮定せざるを得なくなり、清めの儀式は始まったがまだ完全に清くなっていない状態の人と理解するべきである。

他方、レプラ患者の町からの追放は徹底しており、他人との交渉は許されず、患者は一個の死体と変わらなかった。しかし、もしも神への嘆願がない、病気が治癒して再び健康な皮膚を取り戻した者は、わたしが将来語るような数かずの犠牲を供えて、神に感謝しなければならない。

（フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ古代誌』Ⅲ-264、秦剛平訳、1999年）

7-2 レビ記15章との対応

バウムガルテンの指摘通り、4Q274とレビ記15章が本当に対応するのか、以下の表を見ていただきたい。レビ記15章の記述は交差構造になっており、「重い汚れ」「軽い汚れ」「軽い汚れ」「重い汚れ」の順番になっている。ところが4Q274は「重い汚れ」「軽い汚れ」「重い汚れ」「軽い汚れ」の順番になっていて、交差構造になっていない。レビ記15章では「精液を漏らした男」は2番目であるが、4Q274では最後に扱われている。つまりレビ記15章をベースとしていることは間違いないが、必ずしも対応はしていないと思われる。

4Q274	内容・性質	病気の有無	用語
1-4a行	膿の漏出のある男性、汚れの継続性あり	病気	זָב Zav
	別意見：重い皮膚病		מְצוֹרַע Metsora
4b-6行	生理による出血、定期的な汚れ	自然な生理現象	זָבָה Zava
7-8行	病気による血の漏出があるが女性、 汚れの継続性あり	病気	
8行	精液を漏らした男性、汚れの継続性なし	自然な生理現象	שִׁכְבַּת זֶרַע

レビ記15章での順番

	内容・性質	病気／生理現象	汚れの程度
1-15節	膿の漏出のある男性、汚れの継続性あり	病気	重い汚れ
16-18節	精液を漏らした男性、汚れの継続性なし	自然な生理現象	軽い汚れ
19-25節	生理による出血、定期的な汚れ	自然な生理現象	軽い汚れ
26-31節	病気による出血がある女、 汚れの継続性あり	病気	重い汚れ

7-3 汚れの程度がより重い者への注意

汚れを受けた者が、汚れを他人に移さないために清い人から遠ざかる必要があることは単純に理解できるが、1-4行は他の種類の汚れを受けた人からも遠ざかる必要を論じている。このような思想はレビ記15章には述べられていないことから、クムラン宗派独自の思想と推測される。4Q274の4-6行では生理による出血がある女性を扱っている。レビ記15章19節「女性の生理が始まったならば、七日間は月経期間であり、この期間に彼女に触れた人はすべて夕方まで汚れている」と合致するからである。ここでも「血の漏出のある女は七日のあいだ、漏出のある男に触れてはならない」（4行）と語られ、さらに

「彼女は、長期間血の漏出のある他の女に触れてはならない」（6行）と書かれ、より程度の重い汚れに触れないように警告されている。これらの警告から推測できることは、クムラン宗派の思想では、すでに汚れた者がさらに汚れを受けた場合、汚れのレベルが増すだけではなく、汚れを受けた回数だけ清浄過程を経なければならないという思想があったからではないかと想像される。

7-4 女性の生理による汚れ

4-6行はレビ記15章19節の「女性の生理が始まったならば、七日間は月経期間であり、この期間に彼女に触れた人はすべて夕方まで汚れている」に対応することは明らかである。七日の間だけの汚れを語るからである。ただしレビ記には「血の漏出のある女は、漏出のある男に触れてはならない」（4行目）のような警告はない。レビ記15章19-24節は生理期間中の女が使った寝床や腰掛に他人が直接触れると汚れが移行するという「汚れの移行」を語っている。その女が寝たり座ったりすることは、単に軽く触れたのではなく、衣服を通してではあるがお尻の体重という重さがかかった状態で触れたからである。ところが、4Q274では議論の方向が「彼女は、漏出のある男が触れたすべての器、彼が横になった寝台、または彼が座った物に触れてはならない」となっていて、彼女が汚れを移行させる心配ではなく、他の汚れを持つ男が触れた器、横になった寝台、座った物に触れてさらに汚れを増加させる可能性を心配している。

さらに4Q274では6行目に「彼女は、長期間血の漏出のある他の女に触れてはならない」と書かれ、生理期間中の女Aが長期間血の漏出のある他の女Bとの接触を論じている。レビ記では、生理期間中ではない出血の女は15章25節で言及されていて、AとBの接触という意味での議論は存在しない。長期間血の漏出のある女のケースは次の段落で別個に扱っているからである。ここでも1-4行と同様に、より不浄の程度が重い者との接触という汚れが増加することへの心配という視点があることになり、汚れに汚れが加わることへの関心なのである。5-6行目の「彼女は七日のあいだ誰とも交わらないようにしなければならない」は、キムロンによれば彼女は七日の間、性の交わりをしてはならないという意味で、一切誰とも話をしてはならないという意味ではない。

7-5 精液を漏らした男の規定

精液を漏らした男についての規定であるが、レビ記15章16-18節では、汚れは一日のみで、その男は全身を水に浸して洗うことによって夕方になれば潔く

なるとしている。精液を漏らした男が他人に触れたり、物に触れたりしても、汚れは他に移ることはない。汚れが移るケースは、精液が直接付着した衣服や革製品そしてその男と一緒に寝た女である。また汚れを受けた場合でも、衣服や革製品は水洗いし夕方まで待つ、人間は水で身を洗って夕方まで待つことが再び清くなる条件として定められている。ところが4Q274では、「精液を漏らした男に、他の男が触れると、その男は汚れを受ける」(9行目)とあり、他人(B)が精液を漏らした男(A)に直接触れるとAの汚れはBに移行すると定められ、レビ記の規定よりも厳しくなっている。

さらにその直後の展開で「誰であっても、七日間の清めの期間を過ごしている最中の人々が、これらの不浄な人々に触れた場合、食事をしてはならない」というケースが付加される。七日間の清めの期間を過ごしている人とは、精液を漏らした男(A)ではない。精液を漏らした男の汚れは水で体を洗えば、夕方には清くなるからである。ここではAよりもさらに汚れの程度が重い人たちのケースである。これをCと仮定すると、Cがここまで挙げてきたあらゆる種類の汚れた人たちの誰かに触れたら食事をするができなくなると警告している。Cは、以前汚れを受けたことにより、清めの七日間を過ごしている最中だったわけだが、そのCが他の汚れた人に触れてしまうと、死人に触れたケースと同様に、すぐに体を洗って衣服を洗濯しなければ食事に与えることはできないという規定である。ここでも七日間の清めが必要とされた汚れに加えて、すでに汚れた身と規定されているにも関わらず、他の汚れた者に触れた汚れが死人に触れた汚れの程度としてプラスされ、そのプラスされた汚れを身を洗い、衣服を洗濯することによって取り去ってから後食事をする事が許されるという構造になっている。汚れが幾層にも重なったら、上に重なった分を除去して、プラスされる前の状態に戻すことが義務付けられることになる³²。

なお今回は詳しくは扱わないが、4Q274, Frg.2 Coli 4-6には以下のような記述があり、精液を漏らした男の規定は、漏出がある男(Zav)と同等の扱いであることがわかる。

誰であっても、精液を漏らした者に触れた場合、人であっても、いかなる道具であっても、沐浴しなければならない³³。さらにそれを運ぶ者は沐浴をしなければならない。彼が着ていた衣服、並びに彼が運んだ道具は水に浸し、洗わなければならない。

旧約聖書の記述では精液が直接付着した衣服や革製品に触れる以外には、汚

れが移行しなかったはずであるが、4Q274では適用範囲がすべての道具に拡大されている。さらに直接触れなかったにもかかわらず、その道具を運んだだけで沐浴が要求されている。「触れる」という行為から「運ぶ」という行為への適用拡大が認められるのである。

7-6 食事について

4Q274には何度も「食事をする」(3, 5, 9行)という表現が登場する。それも身に汚れがあるときは、その汚れが清まらない間は食事を取ることができないという規定である。このように汚れた者が食事を取ることとはできないという規定はレビ記15章では述べられておらず、クムラン宗派独特の規定と思われる³⁴。旧約聖書内で汚れた人が食事を禁じられる律法³⁵は、神殿に捧げられた神聖なる捧げ物と献納物を食するときの規定であり、主に神殿で奉仕をする祭司に課せられた律法である。一般人に課せられたものではない。食事についての議論は他の場所で論ずることにするが、クムラン宗派の人びとは自分たちの食事を、彼らが神殿内で食べるわけではないのに、しかも彼ら全員が祭司ではないのに、神殿において祭司が食する基準、つまり清さの基準を保つことを自分たちに課している。

8. 結論

本稿は4Q274, Frg.1 Coliの翻訳と注解を目的としたものであるから、必ずしもクムラン宗派の思想を解説するものではない。しかし、旧約聖書が示す清潔規定とクムラン宗派のハラハー的文書の一部を比較しただけで、両者間の差異はあきらかである。クムラン宗派のハラハーは旧約聖書の記述を厳格化させる傾向が顕著であり、「精液を漏らした男」という一番程度の軽い汚れであっても、「(膿の)漏出のある男」と同等の規定が要求されている。この事実からクムラン宗派思想の解明は、清潔規定を中心とした「汚れと清め」の観点から観察することなしには達しえないということになる。

- 1 ユダヤ教律法によって定められた規定を論じた文書で、物語部分と区別してこう呼ばれる。
- 2 フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記2:119-120』、『ユダヤ古代誌18:11-22』、ヨセフスは律法解釈の違いまであまり踏み込んでいない。執筆対象がユダヤ人ではなかったためか、ヨセフス自身が必ずしもこの分野に精通していなかったためであると推測されている。
- 3 Elisha Qimron & John Strugnell, MIQSAT MA'ÁŠE HA-TORAH, *DJD*10 (1994)
- 4 Yacob Sussmann, "The History of Halakhah and the Dead Sea Scrolls-Preliminary Observation on Miqsat Ma'ase Ha-Torah (4QMMT)", *Tarbiz* 59 (1990): 11-76, 46 [in Hebrew]
- 5 Géza Vermes, *Discoveries in the Judean Desert*, New York (1956): 89-97
- 6 Jozef T. Milik, *Ten Years of Discovery in the Wilderness of Judaea*, tr. J. Strugnell (Studies in Biblical Theology 26), London (1959): 74-87
- 7 4QMMTは義の教師が悪の祭司に送った書簡であると推測されたため、書かれた年代が紀元前2世紀中ごろとされていた。しかし最近では、写本断片が6つ発見されたところから、実際に書かれた時には義の教師はすでに他界した後であり、クムラン宗派のハラハーの立場を明確にする必要に迫られ、ファリサイ派との違いを学び、自己確立をさせる目的で書かれたと考えられ、年代を紀元前1世紀中ごろと推測されている。Cana Werman, *Revealing the Hidden Exegesis and Halakha in the Qumran Scrolls*, Jerusalem (2011): 13 [in Hebrew].
- 8 ストラゲネルは後に、暦を示す文書が4QMMTの冒頭部分なのかどうか疑問を呈している。4QMMTの冒頭部分は4Q394と4Q395に残されているが、前者の4Q394には暦が含まれ、後者の4Q395には暦の記述が存在しないからである。ただ4Q394には明らかに1枚の写本断片に暦が冒頭部分として記述されており、最低限これを書いた書記は4QMMTは暦で始まると考えていたと判断できる。John Strugnell, Second Thoughts on Forthcoming Edition, in E. Ulrich and J. VanderKam (eds.) *The Community of the Renewed Covenant*, Notre Dame (1994): 70-73
- 9 死海文書ではつねに *pîn* と綴られ、旧約聖書のヘブライ語綴り *pîn* とは違う表記になっている。
- 10 Joseph Baumgarten, *Discoveries in the Judaean Desert* Vol. 35, Halakhic Texts, Oxford (1999): 99-109
- 11 1953年イスラエル国会によって承認され、ヘブライ語最高機関関連法に基づいて設立された組織で、現代ヘブライ語の新しい用語の建議、答申、決定を軸とした国語政策の実施、ヘブライ語の質的維持と研究、純化を目的とした政府機関 (The Academy of the Hebrew Language)。
- 12 ティベリヤ式旧約聖書本文には、単語と単語をつなぐハイフンのような形の「マケフ」と呼ばれる符号がある。一言節単語と次に続く語の間に意味的関連やある場合にマケフが附されることがしばしばある。単語の中には、このマケフが附されると母音符号が変化する語が存在する。一番顕著な例は、対格指標 (Object Marker) である *nx* で、マケフが附されると *-nx* となる。ところがマソラー伝承がないヘブライ語テキストにはマケフをつける習慣がないので、ヘブライ語アカデミーは、マケフがあっても、なくても *nx* と母音を附すように定めている。

- 13 Elisha Qimron, *The Dead Sea Scrolls* -The Hebrew Writings-, Vol. Two, Jerusalem (2013) : 212-215
- 14 Baumgartenは否定の לא を補足することを提案する。*DJD* 35 (1999) : 102. これに対してQimron (2013) は、כאשר を補足する「彼が嘆願の祈りを始めたとき」。
- 15 エレミヤ書36:7, 38:26, 42:2, ダニエル書9:18, 20
- 16 באברו と読む研究者もいる。T. Kazen (2010) : 61
- 17 ירחץ と読み変える。
- 18 Qimronは[עבימי טוה]רו אל と読む。
- 19 Thomas Kazenは[מגעו יטמא ה]נוגע כולל נוגע באדם と読む。Qimron もKazenに従う。Thomas Kazen, “4Q274 Fragment 1 Revisited - or Who touched whom? Futher evidence for ideas of graded impurity and graded purifications”, *DSD* 17 (2010) : 53-87 この箇所はパウムガルテン版ではなく、キムロン版に従った。
- 20 4Q512 によれば、清めが完結しないと祈りをすることができない。
- 21 ここで言う「食事」とは日常の食事という概念であるよりも、神殿（聖所）において祭司が食する食事、聖なる捧げ物を食べることである。
- 22 レビ記13 : 45-46からの部分引用
- 23 Elisha Qimron, *A Grammar of the Hebrew Language of the Dead Sea Scrolls*, Jerusalem (1976) : 88-89 [in Hebrew]
- 24 E.Y. Kutscher, *The Language and Linguistic Background of the Isaiah Scroll*, Jerusalem (1959) : 393-394
- 25 Qimron, (1976) : 186
- 26 Joseph Baumgarten (1999) : 101-102
- 27 Jacob Milgrom, *Leviticus 1-16*, The Anchor Bible, A New Translation with Introduction and Commentary, (1991) : 994
- 28 Elisha Qimron & John Strugnell, MIQSAṬ MA’AŠE HA-TORAH, *DJD* 10 (1994) : 169, Note170
- 29 Thomas Kazen前掲書 (2010) : 61
- 30 Hanan Birenboim, “Expelling the Unclean from the “Camp” according to 4Q274 li, 11QT^a and the Writings of Josephus”, *MEGHILLOT* X, Jerusalem (2013) : 15-30 [in Hebrew]
- 31 フラウィウス・ヨセフスの記述（紀元一世紀）では伝統的に「レブラ患者」という用語が使われているが、最近ではハンセン病の言及であるかどうか疑わしいとして「重い皮膚病」という表現が使われる。
- 32 Aharon Shemesh, “Transmitting Regular and Irregular Semen Impurity at Qumran: A Study of 4QTohora^a (4Q274)”, *Tarbiz* 82-4, Jerusalem (2014) : 513-528, 518 [in Hebrew]
- 33 「沐浴するטבל」という動詞は他のクムラン宗派文書には見出されない。ここが初めての使用箇所と思われる。Aharon Shemesh, (2014) : 513-528, 524
- 34 Aharon Shemesh, (2014) : 513-528, 516
- 35 旧約聖書の民数記18章に詳しく述べられている。祭司が聖なる捧げ物を食する場合の規定は、レビ記22章に詳細が述べられている。